

21世紀に入り、世界には金融危機、自然災害、貿易戦争、技術革新など、多種多様な難問が続出している。そんな中、新型コロナウイルス感染症が世界的に流行し、厳しさは増すばかりである。

古来、国家や企業をはじめとするあらゆる組織にとって、「リスク管理」と「危機管理」は、その存続に関わる重大事であった。「リスク」と「危機」は同じ意味だと思われがちであるが、そうではない。「リスク」は近い将来起こり得る危険や異常事態のことである。「危機」は現実には発生してしまった危険や異常事態のことである。

共に「管理」と言っているのは、具体的には対処法であり、実践そのものである。そこには大きな負担や犠牲を伴うことがある。取捨選択のスピードこそが肝要である。非常時には特に、先人の多様な事例を学んでいるかどうか、成否の分かれ目になる。東日本大震災以降、何かにつけて「想定外」という言葉が使われるようになったが、自分は歴史を学んでいないと告白しているようなものである。危機の9割は予見できることを考えれば、甘えに他ならないとも言える。

ちょうど百年前、世界はスペイン風邪に席卷され、全体で感染者5億人～6億人、死者2千万人～5千万人を記録した。日本でも感染者約2300万人、死者約38万人と言われている。各国はその時の体験を今回のリスク管理・危機管理に生かすことができたのだろうか。

新聞報道によると、新型コロナウイルス感染拡大の影響で休園・休校となった幼児から中学生までの保護者を対象に、ある大学院の准教授が子どもの1日の過ごし方について調査したところ、増えた時間は、テレビやビデオ視聴（80%）、インターネット動画視聴（62%）、ゲーム機器利用（52%）で、読書の項目はなかった。

また、全国大学生生活協同組合連合会の最新調査では、1日の読書時間がゼロと答えた大学生は、48%と報告されている。

エズラ・ボーゲルは1979年、日本の高度経済成長の要因を分析した著書『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の中で、「日本の成長基盤をなすものは、その高い学習意欲と読書習慣である」と述べ、一国の経済的隆盛の主因をその国民の学習意欲と読書習慣にあると言っている。見事な見識である。

国や企業の存亡に関わるリスク管理と危機管理には、健全な国家観・歴史観・倫理観などが必要なのではなかろうか。それまで読書をほとんどしてこなかった人が、組織の要職に就いたからといって、急に国家観・歴史観・倫理観が湧き出てくるはずはない。

『論語』に次の章句がある。

「人にして遠き慮無ければ、必ず近き憂有り」

（目先のことにとらわれず、先の先まで思いを巡らせていない者にとっては、必ず近いうちに思いがけない難事が起こるものだ）

若いうちの読書習慣こそ、「遠き慮り」の原点である。人生百年時代になればなるほど、エズラ・ボーゲルや孔子の言葉はその重みを増してくる。

日本の将来のために、不要不急の外出自粛が続く今こそ子どもに読書習慣を身につけさせたいものである。それには、子どもの教育に携わる教員に読書習慣がなくてはならない。子どもは自然と教員に感化されるものである。子どもにとって、教員は親の次に身近な大人なのである。